

戦後70年 文学に描かれた戦争

—徳島ゆかりの作品を中心に



あのときからすでに二十七年がたつのに、私はいまだに
母に手を引かれて火の中を走っている夢をみる。—森内俊雄「眉山」より

眉山から撮影された徳島大空襲の焼け跡。左上の山は城山(徳島県立文書館提供)

2015年

8月7日(金)～9月23日(水・祝)

午前9時30分～午後5時

●毎週月曜日休館(ただし9月21日(月・祝)は開館)

会場 1階 特別展示室 3階 収蔵展示室

主催 徳島県立文学書道館

後援 徳島新聞社 四国放送 NHK徳島放送局

観覧料 一般 510円(400円)

高校・大学生 350円(280円)

小・中学生 250円(200円)

()内は20名以上の団体割引料金です。

上記料金で常設展示室もご覧いただけます。

小・中・高校生は、土・日・祝日・夏休み期間中は無料。

高齢者(65歳以上)と各障害者手帳をお持ちの方は半額です。

受付でお申し出ください。

言の葉ミュージアム

徳島県立文学書道館

〒770-0807 徳島市中前川町2丁目22-1

電話. 088-625-7485 FAX. 088-625-7540

http://www.bungakushodo.jp

〈展示作家〉

小説家	瀬戸内寂聴 森内俊雄 海野十三 富士正晴
文芸評論家	佐古純一郎 荒正人 中野好夫
詩人	合田 曠 井内輝吉
歌人	山下 榮 斎藤祥郎 仁尾梅子 河合恒治 山下富美 笹野儀一 村崎凡人
俳人	橋本夢道 吉田汀史 福島せいぎ 今枝蝶人 佐野まもる 特別展示 版画家・吹田文明

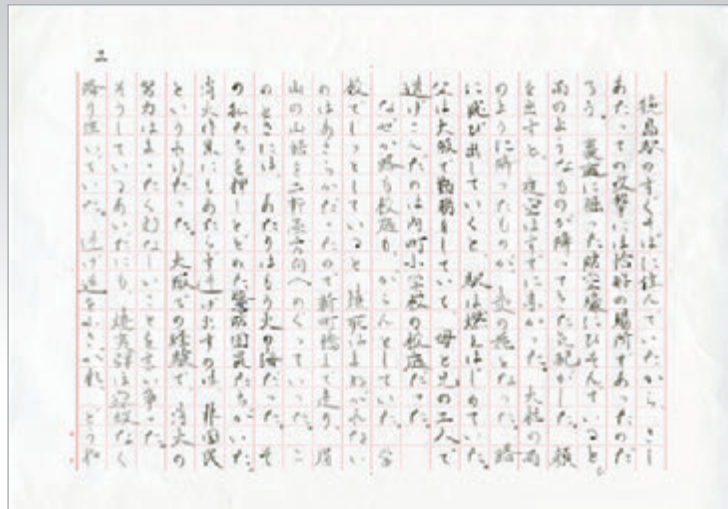
〈関連事業〉

テーマ朗読会	「文学に描かれた徳島大空襲」 8月9日(日)14:00～15:00 ●聴講無料。申し込み不要です。
展示解説	8月29日(土)14:00～15:00 講師／富永正志(徳島県立文学書道館館長) ●申し込みは不要ですが、観覧券が必要です。
講演会	9月13日(日)13:30～15:00 講師／柴崎友香(芥川賞作家、海野十三「敗戦日記」を 取り入れた長編小説『わたしがいなかった街で』著者) ●申し込み・観覧券が必要です。往復ハガキに住所・氏名(ふりがな)・ 電話番号・「柴崎友香講演会希望」とご記入の上、お申し込みください。 当館1階受付でも申し込みめます。

悲惨な戦争を二度と繰り返さないために

1945年8月15日の日本の敗戦から、今年でちょうど70年という節目を迎えました。この間、日本は急速な経済発展を遂げましたが、従軍慰安婦問題や領土問題、憲法改正などをめぐり、中国や韓国との関係が悪化の一途をたどっています。世界各地ではテロや民族紛争が激しくなる一方です。日本の平和の足元にも火が付き始めた今、あの戦争がいかに多くの市民の命を奪い、家族の運命を強引にねじ曲げたかを振り返ることは、決して無意味なことではないでしょう。

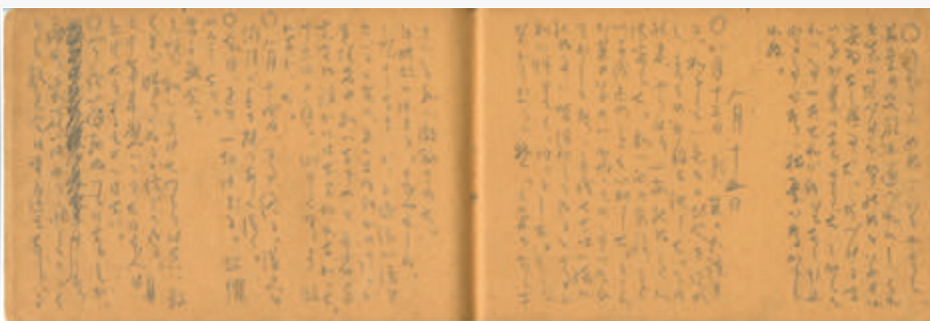
徳島ゆかりの文学者も、千人も市民が犠牲になった徳島大空襲や戦場での悲惨な体験を身を切るような思いで作品に刻みつけています。戦後70年が過ぎ、戦争体験の風化が懸念される中、その一節を著書や直筆原稿、写真などとともに紹介し、戦争の悲劇が二度と繰り返されることのないことを若い世代に伝えることができれば幸いです。



徳島大空襲の体験をつづった森内俊雄の徳島新聞連載エッセー「みちしるべ」第11回の直筆原稿



母と祖父を徳島大空襲で失った瀬戸内寂聴の自伝小説『いすこより』



日本の敗戦により一家心中を決意する記述が見える海野十三「降伏日記」



特攻隊員としての体験を克明に詠んだ山下栄歌集『遂に戦死せず』

焼けた母の背中、材木が焼けたように真黒になっていたが、祖父に掩いかぶさっていたので、腹の方が白かったと叔母が話した時、私ははじめて全身に震えが走り、涙があふれた。
(瀬戸内寂聴『場所』より)

わたしは一兵卒のわたしの視点から見た戦争世界を、後世に向けて伝えて置きたかった……
(富士正晴「戦争小説一私の場合」より)



交通アクセス (JR徳島駅から)

●徒歩約15分

JR徳島駅西側のポッポ街を抜け右折します。

踏切と助任川の西の丸橋を渡り3つ目の信号を右折し約300m。(徳島中学校東隣)

●バス利用

[徳島市営バス] 7番乗り場「川内循環線(右回り)」に乗りし、「吉野本町2丁目」下車、徒歩約5分。

[徳島バス] 2番乗り場「前川経由」に乗りし、「吉野本町2丁目」下車、徒歩約5分。

●タクシー・自動車 約5分。

国道192号線、藍場町交差点を北進、助任川を渡り4つめの信号を右折し約300m。

●駐車場(当館北側)

普通自動車(43台) 大型バス(2台)